

(前号の続き)

# やまぶき

## 4

田舎の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

第53号 平成三〇年(一〇一八) 八月一六日

発行部数 十五部 (不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

### 関孝和の少年期と養子先 (一)

この「聞書」には三ヶ所関新助の名が出てくるという。その一つは「算者会合の事」という節の中に出でてくるもので、次のようなものである。<sup>(8)</sup>

\* \* \*

松木新左衛門(一六五六～一七一五)は戦国時代からつづく駿府の豪商。五代のときが最盛期で、元禄十一年江戸上野寛永寺根本中堂建立の際、用材請負で紀伊国屋文左衛門とともに十万両の巨利をえたという。文献(9)には「松木家は駿河の豪商である。孝和の祖父と父は駿河大納言に仕えたから、当然松木家とは親しくなった筈である。その証拠を『鈴木武雄著、静岡県の数学(昭和57年)』が初めて示した」とあるが、残念ながら「静岡県の数学」を探すことは出来なかつた。

一方、文献(8)には「松木新左衛門始末聞書」が紹介されている。新左衛門の栄枯盛衰を記録したもので、安永八年(一七七九)塗師屋右衛門の筆により新左衛門の死後六十五年に書かれたものである。

しは終日終夜とぞ、時に新助様を師と崇め、流儀を関流と号して、拾遺共に二冊板行改彫しける、書林より関氏へ年々徳用貢べき約束して、面々数冊を取持て、我国々へ退散すと承る。駿府に於て、宝暦、明和の頃迄残る算人は、悉く皆新左衛門が弟子也、駿府の者普く知る処也。割注・日向の算人の事、委しく聞ず

# # #

この中の「拾遺共に二冊板行改彫」の拾遺について、文献(9)は「拾遺諸約之法、付彫管術解、関孝和編、天和三年(一六八三)」を指すのではとて、このとき孝和は四十歳を過ぎ、新左衛門は二十歳頃であろう、としている。勿論それ以前に孝和と新左衛門は古い知り合いであることはわかるが、何時頃から

の知り合いなのかは不明である。

平山諦は文献(9)の中で、「孝和は江戸で父母に別れてから駿河の松木家で養育されたものであるまいか?」との仮説をたて、その根拠を次のように述べている。「その時新左衛門はまだ生まれていなかつたので、四代新左衛門(一七一五年八十五歳で没。奇しくも同年に五代も没)に世話をになつたということか

食を忘れて肝胆を摧(くだいて)四人勘書を毎度突合せ見て、いざ是にて宜しと四人手を打し日は、発端の日より百七十五日なり、其考へ

種も出版されていた。

十四、五歳に成長した孝和は承応二年（一六五三）に出版された九数算法を見落としたことはあるまい。著者の嶋田貞継は同じ駿河の人である。この書によつて一通り数学を学び得たことは勿論であるが、この書の十九年七閏の法の説明は特に丁寧である。孝和を曆学の道に導くに充分であった。』

孝和の学問の真の目的は曆術の研究であるとし、それは「駿河の地で始められたのではないか？」というのが二つ目の平山の仮説であつた。続けて次のようにいう。

\* \*

「明暦元年（一六五五）に再版の出た百川忠兵衛の新編諸算記によつて孝和は開平・開立の法を習得したであろう。かくして藤岡茂元の

算元記、初坂重治の円方四巻記、柴村盛之の格致算書（以上孝和十七歳のとき）などの出版があつた。（途中略）

孝和の数学に徹底的に影響した村松茂清の算俎の出版は孝和二十三歳の時であつた。このように次々に出版された算書は松木家に東西から集つた商人の手によつて速かに入手したであろう。また伊豆の三島の曆師から解説の指導も受けられたであろう。何より重大な事は、野沢定長の童介抄（孝和二十四歳のとき）の出版である。この書で孝

和は奈良のお寺に楊輝算法が所蔵されているのを知つた。急いで奈良（駿河からは五日間ぐらいの行程）に行つて写しとつて帰つた。これによつて、孝和の学力は急に向上したと言う。』

私はこれらの信憑性を論評出来ないが、和算学者・平山諦が最晩年に書き残したことを見つ時その重さを感じる。ただ、三項の「三十六歳頃に関十郎右衛門の跡目相続」との整合性を考える必用がある。駿河にいるうちに甲府藩士の関十郎右衛門の養子に入ったのだろうか。少し無理があるような気もする。

そして三つ目の仮説として、「孝和は寛文五年（一六五五）二十五歳の頃には上州へ移つたのではないか？」という。その根拠も説明しているが、ここでは割愛する。

五、養子・新七（郎）のこと  
孝和の養子新七（郎）は、孝和の弟・永行（松軒）の子と『断家譜』にある。孝和が宝永五年に亡くなると、遺跡を継ぎ（二百俵）、享保九年に甲府勤番となつてゐる。そして享保二十年八月六日重追放となり閑家は断絶する（『断家譜』）。その理由は「同僚の輩と参会し、博奕せし事露顕し」と『寛政譜』にあるのみである。

しかし、調べて行くと単なる博奕のみではなく、もっと大きな事件とかかわりのあることが判明する。それは享保十九年十二月二十四日の夜に発生した「甲府城御金蔵破り」、あるいは「御城内御金紛失一件」と呼ばれる事件との関連である。

この夜甲府は、ある文献では大吹雪といい、別の文献は大風雨というのだが、甲府城内の御金蔵が破られ、小判三百九十三両二分、甲金千二十九両三分、計千四百二十三両一分が盗みとられた。勤番士たちにとつては不名誉極まりない出来事であった。事件を重くみて江戸表から勘定奉行松波筑後守、目付松前主馬らが来甲した。

『徳川実記』の享保二十年正月十九日の条には、「去年十二月廿四日甲府城に賊あり。庫中の税金うせけるをもて。査檢の事仰かうぶり。勘定奉行松波筑後守正春。目付松前主馬廣隆いとま下さる」とある。

だが、一ヵ月余り取り調べたが、肝心の犯人を挙げられなかつた。しかし、関係者の処分は出た。

平常警衛の怠慢を責められ勤番支配の宮崎若狭守は寄合に降格となつたが、同職の建部民部少輔は転勤して間もないため御目見を止められたのに留まつた。この建部民部少輔は孝和高弟の建部賢弘に連なる建部一族であったが、辛うじて処分を免れたのだ。しかし、当番勤番士十七名についてはそうは行かなか

つた。虚偽報告六名と博奕をしていた十一名である。

この後者について『徳川実記』の同年八月五日の条には、「甲府勤番原田藤十郎某。関新七郎某。永井権十郎某。八木三郎四郎某。依

田源太郎某。富士巻四郎某追放たる。同心四

人も同じ。これ博奕の罪によりてなり。組頭能勢清兵衛頬胤は。居宅にて下部等あつまり。

博奕せし事あらはれ。常の曉諭のどかざるをもて。差控を仰付らる」とある。『断家譜』によれば、ここに出て来る原田藤十郎ら六名はいずれも重追放で家は断絶している。関新七郎も含まれているのである。事件の当日は勤番士なのに博奕をしていて「重の罪」ということだったのか。重い処分だった。

なお、「甲府御城内御金紛失役人御仕置一件」(10)という古文書には次のようにある。

\* \* \* (略)

甲府勤番 建部民部少輔支配 原田藤十郎 永見新右衛門支配 関 新七郎 同人支配 永井権十郎 八木三郎四郎 依田源太郎

其方共儀原田藤藤十郎八木三郎四郎  
宅<sup>二面</sup>寄合博奕致し候段  
不届之至候依之重き追放被  
仰付者也

(略)

卯八月五日

右両日之御仕置建部

御目付松前主馬殿民部少輔殿  
御列座<sup>二面</sup>被仰渡之

民部少輔殿於御役屋鋪  
御<sup>二面</sup>被仰渡之

# # #

また、お家断絶後の記述が『増修日本数学史』に二ヶ所次のようにある。

\* \* \*

「享保年間、関家断絶す。新七(孝和の養子)賢弘が家に食す。」の時、新七と謀りて、師

孝和の秘書、円理弧背術を校訂して、一書を全うす。これを円理弧背術と曰う。これ関流

において、極めて秘宝とす」とあるが三上は疑問を呈している。(同書251頁)

「享保二十年家禄を没せられ、家名絶ゆ。新

七、身を寄するに所なし。孝和が高弟賢弘が家に食客たり。その秘藏する所の孝和が遺書

を賢弘に与えて、その校を受け、これを以て、始めてその全きを得たり」。(同書258頁)

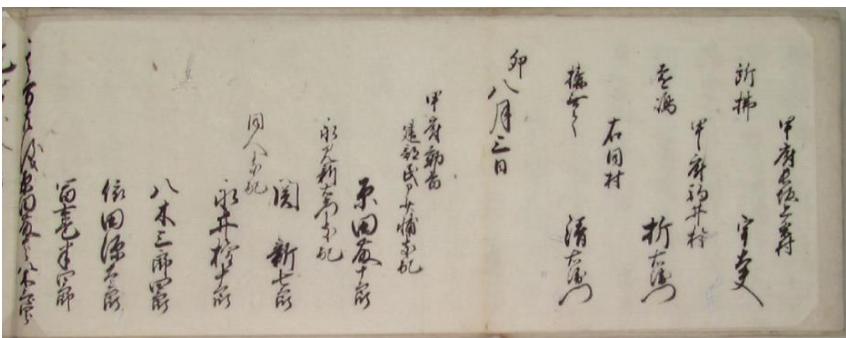
新七(郎)のその後のことはわからない。

なお、犯人高畠村の次郎兵衛は八年後の寛保二年(一七四一)三月に捕まり、六月十八日引き回しの上疊になつた。ある文献には引き回しの順路もある。

#### 参考文献

- (1) 『明治前日本数学史』(第一巻、1956年)
- (2) 『新訂 寛政重修諸家譜』(続群書類從完成会、平成二年)
- (3) 『寛政諸家系譜』
- (4) 猿渡盛厚『武藏府中物語(上)』(昭和38年10月刊、大國魂神社発行)
- (5) 『断家譜 第二』(続群書類從完成会)
- (6) 真島秀行『関孝和三百年祭に明らかになったこと』(『数学史研究』200号、2009年)
- (7) 真島秀行『甲府日記』と『甲府御館記』にみえる関新助孝和(京大数理解析研究所講究録 第1677巻2010年47-58)
- (8) 鈴木武雄『駿遠(静岡)における関孝和と内山七兵衛永貞の消息』(京大数理解析研究所講究録第1677巻2010年37-46)
- (9) 平山諦『和算の誕生』(恒星社厚生閣、1993)
- (10) 『甲府御城内御金紛失役人御仕置一件』(甲州文庫)(山梨県立図書館甲州文庫デジタルアーカイブ(請求記号甲 093, 6-134))
- (11) 遠藤利貞著『増修日本数学史』
- 他に、弦間『和算家物語』(下平『関孝和』『日本数学和算』、上野他『関孝和論序説』)、『甲府市史』、『松木新左衛門始末聞書』(静岡市矢人町文書)などを参考にさせて頂きました。

(終り)

「甲府御城内御金紛失役人御仕置一件」の一部<sup>(10)</sup> (関新七郎の名が見える)

## 関孝和年表

西暦	和暦	歳	事項
1623	元和9		(関五郎左衛門吉直、忠長卿に附属せられ、廩米50俵、大番を勤む)
1627	寛永4		内山家(吉明・永明父子)駿河大納言忠長に仕え駿府に移る
1632	寛永9		内山家(吉明・永明父子)忠長卿事件に巻き込まれ藤岡に移る
1637	寛永14		孝和出生説1
1639	寛永16		父母江戸に出て御天主番。(関五郎左衛門吉直、召しかへされ御寶藏番)
1640	寛永17	1	孝和出生説2
1641	寛永18	2	下総千葉郡上飯山満村(船橋市)の知行100石御蔵米50俵。 家は江戸小石川
1642	寛永19	3	孝和出生説3(3月藤岡生れ、川北朝鄰)
1646	正保3	7	5月2日父永明死す、緑了院日正信士、淨輪寺へ葬る 11月28日永貞、永明の遺跡を継ぐ
1656	明暦2	17	松木新左衛門生れる
1661	寛文元	22	甲府藩成立(江戸桜田殿、綱重25万石) 5月下旬孝和奈良で「楊輝算法」を写す
1662	寛文2	23	祖父吉明死す、正受院義天道虎、淨輪寺へ葬る
1665	寛文5	26	8月9日養父死す、雲岩宗白信士、淨輪寺へ葬る 11月23日甲府藩士関十郎右衛門某の跡目を継ぐ
1673	延宝元	34	[4月16日関五郎左衛門吉直死す、83歳 法名宗空 府中高安寺へ葬る]
1674	延宝2	35	孝和「発微算法」書上る
1676	延宝4	37	孝和甲府宰相綱重に仕えている
1678	延宝6	39	綱重没、綱豊(後の家宣)が2代藩主になる
1680	延宝8	41	孝和「八法略訣」を著す
1681	天和元	42	~1688(貞享5)49歳 孝和「三部抄」「七部書」を著す
1682	天和2	43	この頃、綱豊に勤仕か
1683	天和3	44	「拾遺諸役」成る
1684	貞享元	45	甲府藩の檢地に孝和も従事
1685	貞享2	46	建部賢弘「発微算法演段診解」を出版
1704	宝永元	65	綱豊將軍世嗣として江戸城西丸に移る。孝和も幕府直属の士(旗本)となり、御納戸組頭御蔵米300俵・10人扶持
1706	宝永3	67	11月4日致仕して小普請。10月1日新七郎綱吉に御目見。
1708	宝永5	69	7月25日孝和兄永貞死す、勤持院殿恵莊日随居士、淨輪寺へ葬る 10月24日孝和病没、法行院殿宗達日心居士、淨輪寺へ葬る 12月29日新七郎遺跡を継ぐ200俵
1715	正徳5		松木新左衛門死す、60歳
1724	享保9		8月13日新七郎甲府勤番
1734	享保19		12月24日甲府城御金蔵破り事件発生
1735	享保20		8月5日新七郎博奕に座して追放、関家断絶
1779	安永8		「松木新左衛門始末聞書」成る

歳は1640(寛永17)年生まれを仮定している。

## 編集後記

関孝和の伝記をまとめてみよう、三上義夫の昭和七年の論文から最近の文献まで目を通してまとめたつもりだが、やはり伝記としてまとめるのは難しいの一語に尽きる。調べたことを無理に縮めたため、舌足らずのわかりづらい甲府城御金蔵破りの事件は、関家の断絶に

るのことは難しいの一語に尽きる。調べたことは、舌足らずのわかりづらい

響を及ぼしているとは、それが我が国文化史上に重要な影響を及ぼしていることで、一般にはほとんど知られて

いないことだろう。結びつき、それが我が国文化史上に重要な影響を及ぼしていることで、一般にはほとんど知られて

新拂  
宇文  
新拂  
宇文

を拂  
石岡村  
新拂  
宇文

新拂  
宇文

この間駿河  
の松木家か